

バナナを食べたがったウサギ

上田広美

バナナを買うのが最大の使命だったことがある。ある時、カンボジアの子どもたちの保育園で働くことになったのだが、保育園で役に立ちそうな資格も経験もない身の悲しさで、大は遊具を作るための角材から小はミシンのネジに至るまで、必要な物資の注文を集めては買ってくる調達係になった。毎日の買い物リストのトップに載っていたのは、保育園に通ってくる子どもたち約三百人のおやつ用バナナであった。人手も水も燃料も不足しがちだった保育園では、栄養価も高く、調理の手間も食器も一切不要、手で皮をむいてそのまま食べられ、弟や妹に持って帰りたい子は家に持って帰ることもできるという携帯性にも優れているバナナが最適のおやつだった。

毎朝、町外れの市場まで足を運び、並べてあるバナナを見定めて、なるべく大ききの均一で美味しそうなバナナを人数分だけ買いつく。予算は限られているから、売り子との値段交渉も忘れてはいけない。厄介なのはその日にくる子どもの数が予測不可能なこと、人数分といっても、バナナはキロ単位か房単位で売られていること。朝の忙しい時に、いちいち三百本のバナナを数えるわけにはいかないから、一番上の房を数え、その日の天候や行事を考慮に入れた上で、後は運を天に任せるしかない。足りなければ

言うまでもなく大騒ぎになるし、余っても翌日までとっておくとは限らない。「同じ大きさの」というところは大事な点で、大人の目から見て大差ないバナナも子どもたちの真剣な目からすると随分な違いがあるらしく、選ぶのに失敗した日は、「このバナナ、小さいから換えて」という苦情が後を絶たないことになるのだ。

子どもたちの食べたバナナの皮を一手に引き受けていたのは、保育園で飼っていたウサギだった。子どもたちの遊び相手にと数羽の子ウサギがやってきたのがそもそもの始まりらしい。保育園付きの大工が腕によりをかけてつくった、ウサギ御殿と呼んでもいいくらい豪華で堅牢な小屋に住んでいたこのウサギたち、いつもはその日のウサギ当番が自転車の荷台に山積みになるほど刈ってくる草とバナナの皮で満足していたのだが、たまに小さすぎる不良バナナが続出した結果、皮だけでなく実もウサギ小屋に直行することになると、それはそれは嬉しそうに消費していた。潤沢な餌とおそらくは運動不足のせいでも、いつの間にか子ウサギは大ウサギとなり、次世代の子ウサギも生まれた。子ウサギを「丸呑みしたいくらい」溺愛していた（カンボジア人は大事なものを目の中に入れるのではなく口の中に入れてしまふ）保育園の夜警からの、母ウサギの乳が足りないから缶入りの練乳を買ってこいという注文の前には、練乳の糖分は子ウサギの健康にかえて悪影響を与えるのではないかなどという反論は無効であった。ウサギたちは肉付きの良くなった頃にふつつりと姿を消してゆき、その翌朝には必ず、夜警が満面の笑みを浮かべつつ、経理係に現金を

届けにきた。この金は「ウサギ貯金」という名でしつかりとしま
い込まれ、年に一度の正月パーティーで振る舞われる茶菓に化け
ていたようであった。

保育園には手動ビデオなるものがあり、子どもたちに絶大なる
人気を誇っていた。長い布に一コマずつ描いた絵を巻いて木箱の
中に入れ、それを木箱の脇についたハンドルで回しながら語って
聞かせるという仕組みである。リクエストに応えてたびたび再放
映されていたのは、『バナナを食べたがったウサギ』という話
だった。カンボジアの民話にはよく、ウサギが裁判官として登場
する。ウサギはたいへん賢く、困っている人間や動物が頼ってく
ると、いかなる争い事であれ、その知恵でいとも鮮やかに裁いて
みせては喜ばれる。基本的に正義の味方として活躍するのである
が、時には相談料として大好物のバナナを要求することもあれ
ば、その知恵を悪用して人や動物を騙したり畑の作物を食い荒ら
すこともあつて、一体何を善悪の基準としているのかは少々疑わ
しい。『バナナを食べたがったウサギ』は、バナナを食べたいば
かりに、死んだ振りをして、バナナ売りの老婆を騙すウサギの話
である。老婆はウサギが本当に死んでいるものと思ひ込み、今夜
はウサギ汁だと喜んで拾い上げ頭の上に乗せていたバナナの籠に
入れる。ウサギは籠の中のバナナをすべて食い尽くし、バナナの
皮を置土産に逃げてしまう。

カンボジアにも十二支があり（ただし亥年は豚年になる）、新
聞・雑誌には干支による運勢占いが毎号掲載されている。卯年生
まれの子は、民話の中のウサギの裁判官にあやかかって賢く育つと
信じられている。